

微笑みの坂さん

経営学部教授 朴 大 栄

「光陰矢のごとし」。よく言ったものです。

坂さんが私たちの前から姿を隠して、早や1年。文字通り、彼は姿を隠しているだけなんだ。今にも手を振りながら「山は良かったよ！」と私たちの前に立っている。そんな姿がいつも浮かびます。彼ともう会えないとは信じられない。そんな1年でした。

坂さんが桃大に来られたのは1994年4月、その時、大学教員組合の執行委員であった私は、教研集会の議長をお願いしたことが彼との最初の出会い。第一印象は、バリトンの声の響き、議事取りまとめの鮮やかさでした。その後、組合を通じた五人組（かの四人組とは関係ありません）が学部を超えて自然に結成され、以来、年に数回の集いを持ったものです。しかし、五人組最長老が消え、次いで年下の坂さんが逝き、いまや三人組、風前の灯となって寂しい限りです。

切れ者は概して扱いにくい、人付き合いが悪い、集会で抱いたそんな懸念はすぐに吹っ飛びました。彼は、いつも微笑んで、時にはシニカルな笑いを浮かべて話しかけてきました。大学教員は個性の強い者が多いのですが、彼も人後に落ちません。彼が最も活躍し、桃大の誰もが認める業績は4年間の国際センター時代のものでしょう。時には、個性が表に出て、異なる意見は受け入れないという激しいところもありました。だからこそ、あれだけの実績を上げたとも言えるでしょう。桃大の国際交流の発展は、欧米の扉を開いた野原センター長、急激な拡大に導いた坂センター長を抜きにしては語れません。経営学部長であった私は、この二人に導かれて独・仏・蘭3ヶ国の大

学を回り、初めての学部間交流協定を含む欧州3大学との提携が実現しました。以来、アジア、特に中韓にとどまっていた国際交流が地球規模で桃大に定着することとなったのです。

彼が桃大に在籍したのはたった13年でした。しかし、この間に残した彼の功績は国際交流が続く限り、忘れられることはないでしょう。

欧州からの最初の交換留学生の受け入れはイタリア、ペルージャ外国人大学からの3名でした。アンドレア、アンドレアス、サビーナ、彼・彼女らは今も桃大での1年を忘れていません。ドイツでの長い生活経験のある坂さんがいたことも原因でしょう。特に、ドイツ語に堪能なアンドレアスは坂さんとの会話が楽しそうでした。

昨年の5月、再来日していた3人はそれぞれ東京で働いていました。私がメールを送った時、誰もが信じられない思いで連絡をして来ました。アンドレアスの声は本当に沈んだものでした。

3名から始まった交換留学生の受け入れは、今日、全アジア、ヨーロッパ、オセアニア、アメリカなど、50名を超える学生が世界各国から集まり、本学学生と交流を深めています。まだ一部ではあるものの、この交流が学生たちの勉学意欲をかきたてたのも事実です。この意味でも、坂さんの貢献は明らかでしょう。

「微笑みの坂さん」、彼の存在は、私にとってホッとさせるものでした。エレベータを待っていた時、開いた扉の向こうに彼がいる、ノックをするなり扉を開けて彼が入ってくる、ついこちらも笑ってしまったものです。

彼が隠れた5月8日、1年目はイタリア・ペルージャで迎えることとなりました。因縁のペルージャ。ひょっとしたら、彼のシニカルな笑い顔と出会えるのかもしれない…。

(2008年4月29日記)